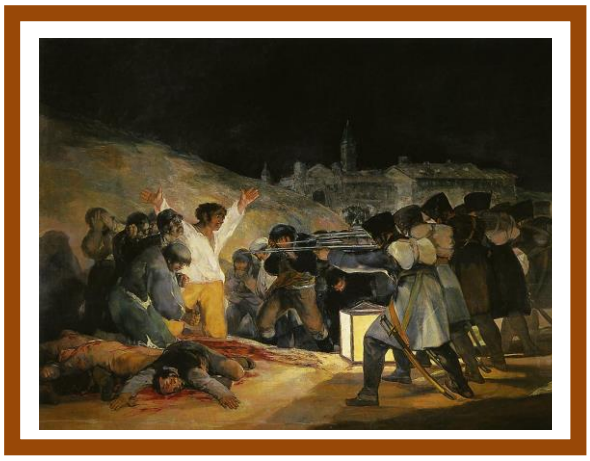
南蛮の風紀行-17　プラド美術館

正直言ってプラド美術館は「ついで」か「おまけ」のつもりでした。聖ヘロニモ修道院の遺跡を部分的に復元しているということで、わたしはプラド美術館の新館（ヘロニモ館）に行くことにしました。その新館に入るには本館も見なければいけないというので、どうせ入場料を払うならもったいないからというのが本音でした。

しかし、入ってみたら自分の不明を恥じることになりました。世界３大美術館というのはフランスのルーブル、ロシアのエルミタージュ、米国のメトロポリタンが定説になっていると思っていたのですが、メトロポリタンの代わりにプラドもノミネートされていたのです。ならば世界４大美術館ということになるわけですが、成程その価値を実感させられました。美術館全体の大きさ、収蔵品の量、その収蔵品の質、どれをとってもわたしはまるで宝の山に迷い込んだアリババのように放心するばかりでした。

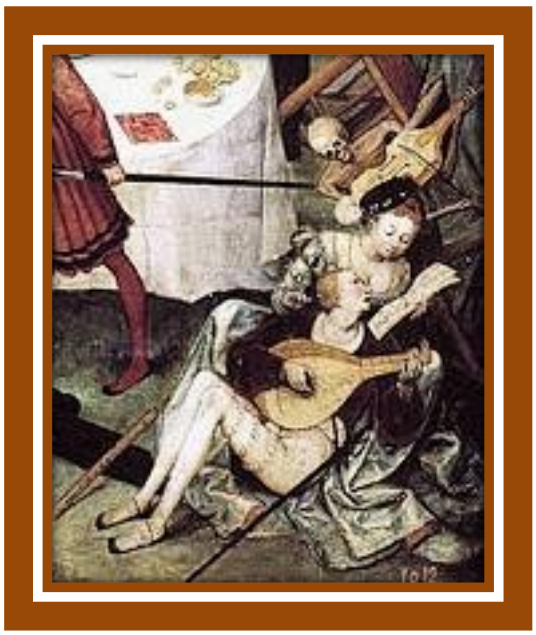


気を取り直して館内地図を見ながら真っ先に向かったのは、ゴヤの「マドリッド５月３日」です。この作品はスペインと言うかイベリア半島の悲しい歴史の象徴です。それにしても人物を描くことが、特にその表情からその人物の心情まで描き出すことが得意なゴヤが、侵略軍であるナポレオンのフランス兵たちの顔を全く描いてないことに、改めてこの画家の訴えを強く感じました。侵略された側が侵略者に感じる侵略という行為の「非人間性」を、ゴヤは顔を描かないことで表現することに成功していると思います。

それにしてもゴヤは宮廷付きのお抱え絵師だけあって、プラドにも人物画が多く展示されています。例の有名な「国王一家の図」もありました。全体の構図と言い一人一人の人物の描出といい、絶対君主であり自分の主人でもある王の家族を、ここまでおちょくることのできるゴヤの画家としての反骨精神は、ゴヤ自身の自分の作品に対する強い自負心から来ていると感じました。

ゴヤの反骨精神といえば、なんといって

も２枚のマハの絵ですね。当時禁止されていたはずの裸体を、それこそ全霊を注ぐようにして描いているのに、着衣のマハの方はどこかおざなりなのです。モデルの皮膚感といい、布地の質感といい、裸体のマハと着衣のマハでは、全く同じ構図であるにもかかわらず、同じ人が描いたとは思えないほどレベルが違うのです。当時は表に出すことのできなかったはずの絵の方に、より情熱を傾けて描こうとしたこと自体に、わたしは興味がわいて仕方がありませんでした。



さて、プラドでわたしの心をもっとも揺さぶったのは、ピーター・ブリューゲルの「死の勝利」でした。「人は誰でも死を免れえない」「死の前には何ん人も平等である」という大命題を絵にして見せているのです。画面いっぱいに国王も貴族も高位の聖職者でさえも死を象徴する骸骨の兵隊に狩られるように征服されていく中、画面右下に小さくマンドリンのような楽器を奏でながら、うっとりと愛を語らうカップルがいます。注目すべきはこのカップルのすぐ後ろで、死の兵隊が一緒になってギターを奏でていることです。

ピーター・ブリューゲルには「農民の婚礼」

や「婚礼の踊り」などの作品があり、わたしの好きな画家のひとりです。彼はオランダ人ですが、オランダにはこの人のためだけの美術館もあると聞いています。彼の「バベルの塔」は中学生なら誰でも教科書で一度は見たことのあるほど有名な画家です。それでも恥ずかしながら、わたしはこの「死の勝利」という絵は知りませんでした。

絵から何を感じるのかは見る人それぞれの人生経験で違うことでしょうが、この凄惨といえばあまりにも凄惨な絵に、わたしはなぜかブリューゲルが「農民の婚礼」に込めたものと同じ、人の営みの滑稽さを感じてなりませんでした。

お目当ての新館ヘロニモ館は、特別展などに使われるスペースになっているようです。伊東マンショたちが見上げたであろう堅牢な回廊も忠実に復元されてはいますが、ごく一部の復元であり、時空に取り残された忘れ物の感は否めません。石の文明が時空を超越しているといことを、わたしはエジプトでいやというほど思い知らされました。役目を終えてまだ、その姿をさらし続けなくてはならない石の建造物群に、憐れみさえ感じたくらいです。だからでしょうか。わたしは一度破壊され復元された、この聖ヘロニモ修道院のかけらのような部分的遺跡の方にかえって安堵感を感じます。

プラドの圧倒的な存在感を語りつくすことは、とうていできそうにありません。いつかまた、マドリッドに来ることがあったら、３～４日はここに通ってみたいと思います。美術には門外漢のわたしでさえ、そう思わせるほどプラド美術館は素晴らしいところだと、今回はそれだけお伝えしておきます。